

特集 日本農学アカデミー12年の歩み

「特集」担当者からひとこと（12年間の記録から）

會田 勝美

日本農学アカデミー副会長

はじめに

私が日本農学アカデミーの会員となったのは平成15年（2003）4月のことであった。アカデミー設立から5年近くが既に経過していた。この年、東京大学大学院農学生命科学研究科長・農学部長を拝命したため、必然的に会員にさせられた（？）と記憶している。平成16年度の役員改選において副会長に選ばれたのだが、何をすればよいのか正直戸惑うことが多かった。当時の会長は、祖田 修先生で、副会長は、唐木英明先生、岩元睦夫先生と私の3人であった。日本農学アカデミー設立後、第3期目の役員ということになる。第1期と第2期は、役員の任期は3年であったが、第3期以降は2年となった。その後、第4期、第5期、第6期と副会長を続けることになってしまった。とくに今期は、総務企画担当ということになり、何をすべきかいろいろ考えていた時に、日本農学アカデミーが設立後12年を経過したことにふと気がついた。そこで、このあたりで一旦これまでの記録を取り纏めておいた方が良いのではないかと思った次第である。とくに私のように途中からアカデミーに参加した者にとっては、設立に至った経緯がよくわからないことから、アカデミーの将来を考える際にも過去を是非知りたいと思ったのが、この特集を企画した理由である。そこで、これまでに会長や副会長を務められた方や設立時の会員を中心に原稿執筆をお願いした。

日本農学アカデミーでは、毎年会報を発行していて、その中に総会報告も決算・予算も含めて詳細に記載されているので、まずこれらを基にして記録を纏めてみることにした。その第一歩として表1に歴代の会長と副会長名を期別に纏めて示した。なお今期から副会長は5名となった。

表 1 歴代の会長および副会長

	就任日	会長	副会長	副会長	副会長
第 1 期	平成 10 年(1998)11 月 30 日	佐々木恵彦	長堀金造	中井弘和	
第 2 期	平成 13 年(2001)7 月 7 日	山下興亜	松田藤四郎	林 良博	三輪睿太郎
第 3 期	平成 16 年(2004)5 月 21 日	祖田 修	唐木英明	會田勝美	岩元睦夫
第 4 期	平成 18 年(2006)7 月 8 日	鈴木昭憲	唐木英明	會田勝美	三輪睿太郎
第 5 期	平成 20 年(2008)7 月 12 日	鈴木昭憲	唐木英明	會田勝美	三輪睿太郎
第 6 期	平成 22 年(2010) 7 月 10 日	三輪睿太郎	唐木英明	林 良博	生源寺眞一
			會田勝美	山野井昭雄	

会報の発行とその電子ジャーナル化

日本農学アカデミーは設立（平成10年(1998)11月）の翌年からほぼ毎年冊子体の会報（7号まで）を印刷・発行し、会員に配布していた。内容は、巻頭言、論壇（会員の意見）、総会記事、シンポジウム案内等であった。たしか平成18年7月の理事会で、会報の発行は電子ジャーナルにしてホームページに掲載すれば、冊子体の作成費と郵送費がかからなくなるので経費の削減になるし、論壇欄に掲載された会員の意見を日本中の方に読んでいただけるのではないかと発言したのだが、その時は具体的な決定はなされなかった。その直前の平成18年4月には冊子体の会報7号が発行され、会員に配布されていた。平成19年7月に開催された理事会において、会報の電子ジャーナル化を改めて提案し、認めていただいた。たしかこのときも、財務状況から見て今後の会報の発行は冊子体ではなくPDF文書としてホームページに掲載してはどうか、その方が経費もかからず、また会員以外にも広く読んでいただけるから、という提案をした記憶がある。その結果、言い出しっぺがまず既刊の会報1～7号のPDF化とホームページへの掲載を担当することになってしまった。早速ホームページ作成の委託先である（財）農学会の担当者に尋ねたところ、会報の各ページをスキャンしてPDF化

まですれば、追加経費なしで掲載していただけるとのことであった。そこで3月末まで所属していた東大の研究室の大学院生にアルバイトとしてPDF化を引き受けていただき、安価でホームページに掲載することができた。併せて第1回から第3回シンポジウムのテープ起こしを中井先生がしていただいたということで、そのデジタルファイルをいただき、これもPDF化して掲載することができた。

会報7号までホームページに掲載できたので、これで滞貨一掃と思っていたところ、会報8号の発行が滞っていることに気づき、急遽、会長の鈴木先生にお願いして、三輪先生（委員長）、門間先生と事務局担当の私との東京農大三人衆で、次の理事会までの暫定的な編集委員会をつくることをお認めいただき、会報8号の編集をすることになった。当然の事ながら、上記三人は論壇の執筆を担当せざるを得なかったが、山崎先生、陽先生にもご迷惑をかけることになってしまった。また会長には巻頭言を書いていただいた。

その後も引き続いて会報の編集を担当した。8号以降の論壇の原稿執筆を私の独断で会員各位にお願いしたところ、殆どの方に書いていただいた。なお農水省関係の研究機関の会員の方には、三輪先生よりお願いし、引き受けていただいた。どの原稿も含蓄のある内容で、感銘を受けた。この場をお借りして、原稿をお書きいただいた会員の方々にお礼申しあげたい。9号以降は年間2冊の掲載を目指した。現在は、6月と12月の掲載を続けている。会報のあり方についてはいろいろ考えた末に、論壇欄は会員の自由な意見発表の場として位置づけ、これに加えて会員外からの寄稿も可能とする「特別寄稿」や「特集」を組むことを試行してみることにした。そこで会報14号では「農学教育の現場から」という特集を全国農学系学部長会議の会長をされていた農学アカデミー副会長の生源寺眞一先生に企画していただいた。執筆者には農学部を卒業し農業の現場で活躍している若手も加えていただいた。なかなか好評であったので、特集として会員外の方にも自由に原稿を書きいただけるシステムは有効であると確信した。ただ、これまで一度も原稿料をお渡しできていないのは申し訳ないと思っている。日本農学アカデミーの会報に掲載されることを名誉と思っていたけると嬉しいのだが。また14号では、特別寄稿欄も設け、これも会員外であるが長年科研費事業に携わってきた、宮寫和男氏に「大学を取り巻く状況と科研

費 — 雑感 —」として寄稿いただいた。次の会報15号については、これも特集として「日本農学アカデミー12年の歩み」を取り上げることにしたが、今回の特集は、これまで農学アカデミーの運営に携わった会員を中心に原稿をお願いした。

私としては、会報を年2回程度発行をすることにより、農学アカデミーとしての活性化がはかれるのではないかと考えている。会報の今後のあり方については、会員の皆様の忌憚のないご意見をもとに理事会で検討していただければと考えている。

これまでに発行した会報の発行年月とページ数を表2に纏めてみた。累積ページ数は800頁を超える。

表2 会報発行の状況

号	ページ数	発行年月
創刊号	13 ページ	2000 年（平成 12）2 月刊行
会報 2 号	29 ページ	2000 年（平成 12）12 月刊行
会報 3 号	34 ページ	2001 年（平成 13）12 月刊行
会報 4 号	38 ページ	2002 年（平成 14）12 月刊行
会報 5 号	52 ページ	2004 年（平成 16）5 月刊行
会報 6 号	47 ページ	2005 年（平成 17）5 月刊行
会報 7 号	42 ページ	2006 年（平成 18）4 月刊行
会報 8 号	48 ページ	2007 年（平成 19）12 月刊行
会報 9 号	76 ページ	2008 年（平成 20）8 月刊行
会報 10 号	116 ページ	2008 年（平成 20）12 月刊行
会報 11 号	76 ページ	2009 年（平成 21）6 月刊行
会報 12 号	85 ページ	2009 年（平成 21）12 月刊行
会報 13 号	58 ページ	2010 年（平成 22）6 月刊行
会報 14 号	89 ページ	2010 年（平成 22）12 月刊行

総会開催日と開催場所、参加者数、会員数の変遷等

会報には、総会報告が掲載されている。その部分から、総会開催日、開催場所、参加者数や会員数を抜き出し、纏めてみると表 3 のようになる。

表 3 総会開催日と開催場所、参加者数、会員数の変遷等

	総会開催日	会員数	出席者数(委任状)	開催場所
設立総会	1998 年（平成 10）11 月 30 日	160 名	130 名（委任状を含む）	
第 2 回総会	1999 年（平成 11）11 月 19 日	170 名	30 名（92 名）	日本学術会議会議室
第 3 回総会	2000 年（平成 12）9 月 4 日	183 名	26 名（121 名）	日本学術会議会議室
第 4 回総会	2001 年（平成 13）7 月 7 日	198 名	28 名（127 名）	東大農学部大会議室
第 5 回総会	2001 年（平成 14）7 月 30 日	203 名	31 名（134 名）	日本学術会議大会議室
第 6 回総会	2002 年（平成 15）7 月 31 日	200 名	27 名（133 名）	日本学術会議大会議室
第 7 回総会	2003 年（平成 16）5 月 21 日	222 名	24 名（153 名）	東大農学部大会議室
第 8 回総会	2004 年（平成 17）6 月 4 日	206 名	27 名（120 名）	日本学術会議大会議室
第 9 回総会	2006 年（平成 18）7 月 8 日	219 名	42 名（112 名）	東大農学部弥生講堂
第 10 回総会	2007 年（平成 19）7 月 7 日	256 名	28 名（149 名）	東大農学部大会議室
第 11 回総会	2008 年（平成 20）7 月 12 日	242 名	24 名（130 名）	東大農学部大会議室
第 12 回総会	2009 年（平成 21）7 月 24 日	239 名	32 名（126 名）	東大農学部大会議室
第 13 回総会	2010 年（平成 22）7 月 10 日	211 名	26 名（105 名）	東大農学部大会議室
第 14 回総会	2011 年（平成 23）7 月 16 日	予定		東大農学部フードサイエンス棟中島董一郎記念ホール

設立総会が 11 月 30 日に開催されたことによると思われるのだが、年々総会開催日が早まり、2003 年には 5 月 21 日になっている。その後しだいに遅くなり、

ここ数年は7月になっている。農学アカデミーの事業年度は、確か発足から数年後には、毎年4月1日から翌年3月31日までと改められ、決算日から3ヶ月以内に総会を開き、承認を受けることと会則に規定されていたが、ここ数年は慣例として7月（4ヶ月目）に開催されていた。そこで昨年度の会則改正にあたって現状に合うように会則を改正した。

また総会記録には、当時の会員数が書かれていたり、記録から読み取ることが可能であったので表3に記した。それによると会員数は、当初160名であったが、次第に増加し、2007年には256名と最多となった。その後、会員数は漸減している。総会参加者は24～42名の間であるが、委任状提出者により総会は毎年成立している。興味深いことに総会の開催場所は、2004年度までは日本学術会議会議室が多いが、それ以降は東大農学部会議室等が多い。この現象は、農学アカデミーの運営が、最初は日本学術会議の会員が主体であったが、次第に大学とくに東大農学部関係者に主体が変わってきたことを示しているように見える。時期的に見ると、日本学術会議の改組、特に第6部農学の括りが消滅したことに、関係しているようにも見える。そのことが農学アカデミーにとって良いことか否か、今後の農学アカデミーのあり方も含めて考えて見る必要がある。設立当初の数年は、設立に関与した日本学術会議の会員が中心となってアカデミーを運営してきたが、やがて熱気が冷め、その後の運営を東大農学部関係者が主に担って来たことを示しているようにもみえる。いずれにせよ設立12年を経過し、今一度原点に立ち返って考えてみるが必要な気がするのでは私だけであろうか。

シンポジウムの記録

表4 これまでに開催されたシンポジウムの一覧

☆ 第12回シンポジウム「消費者の不安に農学者が答える」2011(平23)年6月1日

☆ ミニシンポジウム「農医連携の学術とホット・イシュー」2010(平22)年7月10日

- ☆ 第 11 回シンポジウム「農学における分析化学の最先端」2009（平 21）年 11 月 7 日
 - ☆ ミニシンポジウム「新公益法人制度における学協会のあり方を考える」2009（平 21）年 7 月 24 日
 - ☆ 第 10 回シンポジウム「農林水産業の新展開：政府に対する緊急提言」2008（平 20）年 11 月 15 日
 - ☆ ミニシンポジウム「我が国における GMO 研究の現状と課題」2008（平 20）年 7 月 12 日
 - ☆ 第 9 回シンポジウム「植物育種の現在・未来と大学の役割」2008（平 20）年 3 月 8 日
 - ☆ ミニシンポジウム「科学技術と社会－農学を取り巻く最近の状況」2007（平 19）年 7 月 7 日
 - ☆ ミニシンポジウム「アカデミズムの立場から森林認証を考える－持続可能な生産と森林認証制度－」2007（平 19）年 3 月 8 日
 - ☆ 第 8 回シンポジウム「新しい農学への結集を－日本学術会議新体制下における農学研究ネットワークの構築－」2006（平 18）年 7 月 8 日
 - ☆ 第 7 回シンポジウム「人と動物との共生－伴侶動物・家畜・野生動物－」2005（平 17）年 6 月 4 日
 - ☆ 第 6 回シンポジウム「都市民のための『農』の多面的展開」2004（平 16）年 6 月 5 日
 - ☆ 第 5 回シンポジウム「食の安全性を科学する」2003（平 15）年 6 月 7 日
 - ☆ バイオサイエンスフォーラム「2002 in 鶴岡」2002（平 14）年 10 月 9 日
 - ☆ 第 4 回シンポジウム「『農』への期待－農業・森林の多面的機能をいかに活用するか－」2002（平 14）年 6 月 7 日
 - ☆ バイオサイエンスフォーラム「2001 in 香川」2001（平 13）年 10 月 15 日
 - ☆ 第 3 回シンポジウム「持続的農業を目指した農学の新展開」2001（平 13）年 6 月 6 日
 - ☆ 第 2 回シンポジウム「農学におけるバイオテクノロジーの新しい展開」2000（平 12）年 5 月 31 日
 - ☆ 設立記念シンポジウム「21 世紀の農学ビジョン」1999（平 11）年 6 月 2 日
-

農学アカデミーでは、だいたい毎年一回のペースでシンポジウムを開催してきた。これまでに開催されたシンポジウムのタイトルと開催日は表 4 のとおり

である。とくに第1回から第3回のシンポジウムについては中井先生がテープに記録し、後日テープ起こしをしていただいたので、写真や図表も取り込んでPDFとして、ホームページに掲載している。同じように第9回シンポジウムもPDFとして会報8号に掲載している。また総会の際に、ミニシンポジウムを企画することもあった。今回の記録を取り纏めていて気がついたのだが、バイオサイエンスフォーラムというシンポジウムが2回開催されていて、いずれも共催が全国農学系学部長会議と日本農学アカデミーとなっている。主催は2001（平13）年は香川大学農学部で、2002（平14）年は山形大学農学部である。全国農学系学部長会議の総会は春と秋に開催されていて、春は関東地区の、秋は地区持ち回りで地方の大学が当番校となっている。2001年は香川大学農学部が、2002年は山形大学農学部が当番校であったので、秋の総会終了後にバイオサイエンスフォーラムが開催されていたように思われる。2003年4月に私が全国農学系学部長会議の会長になったのだが、6月の全国農学系学部長会議の総会後の土曜日に日本農学アカデミーのシンポジウムが開催されているので、おそらくバイオサイエンスフォーラムは2回で終了したのではないかと思われる。その理由は不明だが、設立当初は、全国農学系学部長会議と日本農学アカデミーは一体として認識されていたのだが、次第に組織としての独立性を強めてきたのかもしれない。そういえば、農学系学部長のアカデミー会員への入会が最近少なくなってきたように思われる。農学系各組織の連携の在り方についても、今後検討されるべきものではなからうか。

財務状況

表4に大まかな財務状況、すなわち年度毎の収入、支出と繰越額を纏めて示した。会費は、これまで年額1万円であるが、第2期までは3年分を纏めて前納するようになっていた。その後は、年度毎に1万円を納入していただくことにしている。平成23年度からは、75才以上の会員の方はお申し出により、会費は5000円とすることが可能となった。ただし、この場合は「学術の動向」の配布は行わない。

会員名簿はこれまで2回発行しているが、近年は個人情報保護の観点から発

行をやめている。また前述したように、会報7号までは冊子体で発行し会員に郵送してきたが、平成19年度から既刊の1号から7号までをPDFとしてホームページに掲載するとともに、8号からは冊子体での発行をやめ電子ジャーナルとしてホームページに掲載することに変更した。これらによって繰越額が増加してきているのがわかる。そこで平成23年度からは正規の予算項目としてシンポジウムの経費的支援ができるようにすることを計画している。実行するにはもちろん平成23年度の理事会、総会での承認が必要である。なお、平成22年度には予備費を使用して試行を行った。支援については、日本学術会議第2部や関連分科会主催のシンポジウムを主な対象と考えているが、何らかの選考基準が必要かもしれない。

表4 財務状況

年度	収入	支出	繰越額	備考1	備考2
平成10年度	4,800,000	1,078,412	3,721,588	会費 30,000 円/3年	葉・シンポポスター印刷
平成11年度	401,765	1,624,169	2,499,184	〃	会員名簿・会報1号・ポスター印刷
平成12年度	1,056,087	2,031,047	1,524,224	〃	会報2号・ポスター印刷
平成13年度	5,182,293	2,121,468	4,585,049	〃	会報3号・ポスター印刷
平成14年度	662,173	2,950,842	2,296,380	〃	名簿・会報4号・ポスター・葉印刷
平成15年度	928,124	1,235,876	1,988,628	〃	
平成16年度	2,441,172	2,472,182	1,957,618	会費 10,000 円/年	名簿(第2期追補分)・会報5号
平成17年度	2,350,000	2,504,726	1,803,063	〃	会報6号・ポスター印刷
平成18年度	1,654,840	2,206,576	1,252,231	〃	会報7号印刷
平成19年度	3,045,777	2,166,500	2,131,508	〃	会報の電子ジャーナル化
平成20年度	2,539,768	2,205,850	2,465,426	〃	〃
平成21年度	2,382,131	1,737,558	3,109,999	〃	〃

おわりに

日本農学アカデミーの設立から12年が経過したことから、総会の記録等からこれまでの歴史を簡潔に纏めてみました。会報7号の論壇には、「日本農学アカデミーの誕生にいたる経緯と私学教育への期待」と題した松田藤四郎先生（東京農業大学理事長）の論説が掲載されていますので、本特集と併せてお読みいただければ、設立の経緯等がよくおわかりになるように思います。松田先生の論文の中に、1999年1月に刊行された「学術の動向」の末尾に、日本農学アカデミー設立の報告が掲載されているとの記載がありました。そこで探してみたところ、そこには設立趣意書、最初の会則・内規と役員リストが掲載されていました。事務局の南さんによると、当時の「学術の動向」の編集委員長は島田淳子先生（農学アカデミー発足当時の理事、現在も会員）でしたので、報告記事は島田先生によるものではないかとのことです。設立趣意書は、日本農学アカデミーのホームページにも掲載されているものと同じです。会則は、その後改正され、設立時の会則はホームページから削除されていましたので、これもホームページに掲載することにしました。

会員の皆様には、設立趣意書をもう一度お読みいただき、設立の原点に立ち返り、日本農学アカデミーの将来をお考えいただければ幸いです。